



今月の主な目次

- 飼料高騰の背景について
- 根釧地域におけるイタリアンライグラスを用いた無除草剤雑草防除法

- アルファルファ「ケレス」を栽培してみませんか?
- 平成19年産粗飼料の傾向

時の話題

温暖化と北海道農業

20世紀は油の戦い、21世紀は水の戦いといわれ、年末年頭でのテレビの特番は環境破壊による地球温暖化そこから派生する食料問題をテーマとした話題が絶えない。食糧自給率40%を割った我国において食料の未来を描く戦略はどのようなものなのか、温暖化現象は北海道だけを捉えれば農作物適用品目の広がりを得てますます日本の食料基地としての重要性和責任のある地域となるだろう。

世界の食料需給を決める要因又は大きな影響を与えている要因として需要面で捉えると、①世界人口の増加②BRICs諸国での急激な経済発展、所得の向上に伴う畜産物の需要増加③バイオ燃料生産の増加に伴い穀物の燃料仕向け量も増加。供給面で捉えると①収穫面積、単位当たり収穫量の伸び率はほぼ横ばい②異常気象の頻発、砂漠化の進行・水資源の制約③家畜伝染病の発生です。

この現象は我国の酪農畜産に既に影響がでてきており昨年来の豪州での大旱魃・バイオエタノール問題・中国の富裕層の増・国際的な乳製品の逼迫から乳製品の国内在庫の急激な減少、穀物相場の高騰高止まりによる連続の配合飼料の値上げなどです。今後の我国の経済力動向によるが①我国が経済力に勝る国と食料を

奪い合う事で我国の食料輸入の減少や価格高騰を招く②輸出国が自国への供給を優先し輸出規制・制限を行うことで我国への食料輸入が途絶・減少する③農地を最大限有効活用せず、なおかつ大量の食料廃棄を行う中で食料輸入を行えば貧困国への食料が減少し飢餓が拡大する。このような背景のもと世界の食糧需給は逼迫の道を走り始めている。

食料の奪い合いにより我国の食料調達に支障が生じている事例としてトウモロコシは、米国で石油エネルギーからの脱却を目的としてエタノールの生産拡大を図っておりトウモロコシの需要が急増、このためエタノール会社と我国の穀物商社との間でトウモロコシの奪い合いが起こり、今までのような成約できてない状況にある。このような世界の食料需給の見通しを踏まえ、食料の6割を海外に依存する我国としてどのように安定供給を確保していくのか、食糧の安定生産・輸入・備蓄のバランスの重要性、間違いなく環境が変わりお金で海外から食料を安定的に調達する時代の終焉を迎えたのである。

従って、国土面積の2割を占める広大な土地を有する北海道は根釧・天北の草地を利用した大規模な酪農経営、十勝・北見・斜網の大規模な畑作・酪農畜産経営、空知・上川などの水田・野菜等、温暖化が進む中での農業環境は都府県の農業に比べると有利な地域となり食料基地としての期待は更にたかまるだろう。

(専務取締役 岡村 一範)